　　　　　通信第七十六号　向こうからの道（すべて如来さまのお慈悲の中）

　五月十八日の第三十二回ベラルーシ・リモート法座の終わりごろ、ブルガリヤにおられるイーラさんからご質問がありました。「浄土という国は考えられた国ですか。それとも事実ある国ですか」私は「人間が考えた国ではありません」と即座に申し上げました。しかし、事実あると言っても地図にある国ではありません。精神界ですから。どう表現したら伝わるのか戸惑いつつ申し上げました。「いのちは毛虫のようなときもあり、さなぎのようなときもあり、にもなります。蝶になったらわかります」すると、わからないという反応の堅い表情でした。彼女は中国浄土教を研究しているとのことです。多いときは二時間もお念仏を称えていると聞いて驚きました。家族でロシヤから逃れてご苦労されているようです。ホスト役のスラーバさんも息子さんが大統領選挙に抗議したために十二年の刑を受けて服役中です。最近表情が明るくなり落ち着かれた雰囲気が伝わってきます。リモートの日が楽しみであるとのことです。

浄土の真実は国を超え、民族を超え、宗教を超えています。毎月その事実を見せて頂いて私は大変有難いのです。「阿弥陀の親のもと兄弟です」とスラーバさんの方から言われたのでうれし涙がにじみました。三年間毎月一回も休むことなく続けて来た甲斐があったと喜びがこみ上げてきました。スラーバさん達は私のユーチューブも視聴してくださっているようです。スラーバさんの奥さんは日本人です。「戦争が終わったらぜひとも行かせて頂きます」と約束しました。スラーバさんのお宅には私の送った「帰命尽十方無碍光如来」の十字名号が掛けられています。

　七月三日から十五日にかけてのアメリカのサンフランシスコ（西海岸）とニューヨーク（東海岸）のご縁の日が近づいて来ました。この度のいきさつは、開教師の名倉幹さんが原田マービンさんとの会話の中で私の名前が出て驚いたそうです。それを聞いて私は遇いたいと思いました。本願道場へ向かう新幹線の中で法喜さんが「アメリカへ行ったら」というのでマービンさんへメールしました。すぐに「遇いましょう」という返信が来ました。「観光ではなく念仏のご縁の人に遇わせて頂きたい」と送ると「わかりました」とのことです。そこからアメリカ行きの道が自然に開かれて来ました。

こういう時、私はすぐに大石先生が浮かんできます。大石先生との出遇いとお育てによって私の人生はまったく変わってしまいました。ある時、先生はよく接ぎ木のお譬えをされました。私の宿業の台木に先生によって本願のいのちの木が接ぎ木されました。ふり返ると二十七年前のブラジル行きの時も、先生が「旅費の足しにしなさい」と、お渡ししたばかりの報恩講の御法礼をすべて戻されました。そこで引くに引けなくなったのです。先生の肉体は亡くなっても、願いのは生きています。亡くなられて十六年もたったのかと驚いています。

　さて、アメリカへのお土産に私は十字名号を十五本ぐらい書かせて頂きました。無碍光という（礙、止まって進展しない・石によってさえぎられること）のない世界が信じられるようにお育て頂いたお陰で、が小さく、神経質で、心配性の私の性は変わらないままに新天地へ前進させられるのです。旧約聖書のエジプト記の中で海が海底から真っ二つに割れ、そこから一筋の道が現れた。とありますが、二河白道のお譬えとも通じるものを感じさせられます。向こうから道が開かれて来るのです。素晴らしい念仏者でありセラピストでもあるジネステ荒木佐恵子さんから「五日間部屋を自由に使って下さい」との申し出がありました。

また、先生と夕食を共にさせて頂けるご縁ができました。羽田先生は五十三年前にアメリカへ渡られアメリカの浄土真宗の第一人者です。実は安田理深先生の京都の相応学舎で何度かお見かけしたことはあったのですが一度も会話したことはありませんでした。それがアメリカでご縁になるとは不思議です。

マービンさんは日本の龍谷大学に若い頃留学されていました。私が藤谷秀道先生を紹介した時のことをよく覚えておられ、恩義を感じておられるとのことです。異国の人でもやはりは印象に深く残るのでしょう。現在、マービンさんはカリフォルニア本願寺開教総長となられています。普通だったら簡単に会える人ではありません。しかし、気さくなお人柄で、学生の頃よりさらに低いご姿勢です。農村出身で苦労された背景がうかがえます。西海岸のサンフランシスコの近くのバークレーにおられ、サンタマティオのお寺で、通訳付きのご法座を開いて下さることになりました。

名倉さんは東海岸のニューヨークに在住です。七月一日から八日まではコロンビアに行かれているとのこと、十日から十五日までお世話になる事になりました。ピュアランドというドキュメンタリー映画の主演もされています。サンフランシスコと時差が三時間あるそうですが想像がつきません。そしてゲーリーさんのお宅へ行くことになりました。ゲーリーさん宅のお内仏の上にはゲーリーさんの（僧侶となること）のお祝いに私が書かせて頂いた「無量寿」の額が掲げられています。

準備をしながら、日々アメリカが具体的に向こうから来るようです。自力では思いもつかなかった世界が向こうからやって来ます。浄土の世界も同じであります。大石先生の教えです。

自力というのは、自分に値打ちをつけているのです。Ｋさんを下に見て、世話をしてあげるという感覚で、自分を上においているのです。Ｋさんだけでなく、すべての人に対してそうだったのです。仏様の教えについても、自分を立てて、自分の枠の中で理解しようとしていたのです。自分が自分の墓穴を掘っていたのです。

道を歩いていて、それに気づかされたとき、Ｋさんの前に合掌して、ずかされました。実在のＫさんに対してではありません。そのとき、自他、の上下関係にあったＫさんと私は

「光の中」にあることが、感知できたのです。墓穴を掘る自力が役立たなくなって、仏様の仏智光明に帰依する心をたまわりました。

そこが出発点と成って、娑婆の中にありながら、浄土の旅が始まったのです。出発点、浄土の旅について法座で話させていただきますが、何度話しても、話すたびに、出発点からの距離が進むというか、味わいが深まっていきます。逆に言えば、どれほど進んでも「帰命の一念」が出発点なのです。ここに立ち返ると、いつも新鮮な思いがよみがえります。

　　世間では、この世に生まれて「おぎゃあ」と叫んだ時が誕生日です。そして、毎年、誕生

　日を迎えます。いつまでも満一歳ということはありません。一歳と二歳では内容が違います。

　浄土の旅も同じことです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　書信第８０信❘７

大石先生のご縁を頂くまで、いや「弥陀たのむ一念」まで、私は大石先生に出遇っていなかった

のです。ご本願が信じられなかったのです。上から念仏をふりかざしていました。だから苦しく下に落ちることが恐くて不安にかられていたのです。無明の自分に遇えていなかったからです。そこのところをはっきりと大石先生は書かれておられます。

　聞こうとしないのが「私であった」と気づかされたとき「光に遇えた」のです。「如来のみ声が聞こえた」のです。仏様に背を向けて逃げ回り、自分に値打ちをつけている自力の正体が見えたら、自力を突っ張ることはできません。仏様の光、すなわち「絶対智」に「お願いします」と、たのまざるを得ません。そこを仏様が、**たのませて**、**たのまれて**、「浄土にむかえとるぞ」と、責任をもって浄土往生の旅をさせて下さるのです。太字のところを「発願回向」と申されるのです。**たのむ心をたまわる**ということです。

　　「南無は願なり」。私が願うのではありません。私がたのむのでもありません。死んでもたのまんぞとふんぞり返っている私を、静かに照らし出して下さるのです。その間、何十年かかったことでしょうか。自分の自力の正体が見えたら、自己を主張することはできません。それでも自己の考えを立ててゆくのは、光に遇えていないのです。そこの転機の様子は、これまでの著書に述べています。～～

　　「たのむ一念」の関門を通らなかったら、そこからの話はできません。受け取って下さる方も、最後にその関門を通ってくださらなければ、念仏往生という大利益を受けえないのです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　書信８０信―８

先生は信心を到達点とはしませんでした。「初一念」スタートであります。そこから始まるのです。友松法純さんは「今までの人生は準備期間だった」と聞法に立ち上がられました。旧約聖書の初めに

　神は「光あれ」と言われた。すると光があった。神はその光を見て、良しとされた。

普遍宗教の世界は共通しています。それからの生き方が変わるわけです。そこを起点としてどういう日常生活の在り方が進展していくのか。生長されていくのか。一人ひとりの個性、宿業のままに救われていくのです。先生はそのお手本となって最後まで見せて下さいました。

又、出発点はる世界でもあります。親鸞さまは「来」をかえるとも申されています。

　また「来」は、かえるという。かえるというは、願海に入りぬるによりて、かならず大涅槃　に至るを、法性のみやこへかえるともうすなり。法性のみやこというは、法身とも申す如来の、さとりをにひらくときを、みやこへかえるというなり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　唯信鈔文意　聖典５４９頁

　先日、名倉さんのリモートの中で「今がわかりません」というご発言がありました。私は黙して皆さんのご意見を聞かせて頂きました。大事なことを言って下さり、本人も満足されたようなのでそのまま終わりました。そのことがご縁で私に問いが出ました。私と父はそんなに話すことが無く、意見の衝突がよくありました。でも、布教などに行って帰ると私が「帰ったで」というと「帰ったか」の一言があり、なぜか、うれしく、ほっとしました。なぜ、あの一瞬に安心が与えられたのでしょう。普通の表現であれば「ただ今」・「お帰り」であります。「そうか。帰るところに帰れた、『待っていたぞ』の親心があったから」待っておられる世界が有り、ただ今と帰れた時の安心感であったのです。阿弥陀の親様と浄土の魂の故郷がある人生は落ち着いた味わいが浄土から開かれて来ます。

　先ほど、これを書いていた時、名倉さんから静座法話会のメンバーから私宛に次のようなメールがあったと報告を受けました。

　　「無智」ということと「弥陀タノム」は同時に来る。如来のご廻向ゆえにお礼の念仏」と仰ったことによって大きな気付きをいただきました。なにか不思議でした。「毎日、妄念妄想は次々と出て来るが、その根拠が絶たれているので明るく生きて行ける」と、仰っていただいたことがとても救いになりました。

嬉しい内容でした。

先日、寺で研修会があるために草取りをしていたときです。数日前にそこは草刈りをしていた人を見かけました。「だな、一杯草が残っている」と内なる声がして草を取っていると「これが如来さまから見たお前の姿ぞ、お前の仕事ぶりではないか」という向こうからの声に頭が下がり、お礼の念仏が出てくださったのです。今までずっと私は「今の人たちは」とか「今の若者は」と無意識に人を裁いて自他ともに地獄に落ちていたのです。早く自分の姿に目を覚ませとの如来さまからの呼びかけであったのに無視してきたのです。申し訳なさと、嬉しさがこみ上げてきました。うなずきながら草取りをしているとホトトギスやの澄みきった鳴き声が聞こえて来ます。不思議な豊かさや幸福感の味わいがありました。

　朝に鳥の声を聞くと人間の心が八時間安定すると聞きました。まして如来さまの声、南無阿弥陀仏は無限の安心感の世界であります。私は「ちかちゃん」と呼ばれて、ご門徒さんや近所の人たちから親しまれた子守の人に育てられました。命じられたら、一日中でも草取りをしている人でした。猫が背中に乗って草取りをしていることもありました。「ちかちゃんもこういう時間を過していたのか、それなりにちかちゃんにも幸福があったのか」と内なる声がしました。地位やお金という世界でなく幸福はたくさんあったのかと知らされたことでした。

　阿弥陀経の中で

　　舎利弗、その仏国土には、なお三悪道の名なし。何にいわんや実にこのもろもろの衆鳥あらんや。みなこれ阿弥陀仏、法音をして宣流せしめんと欲して、変化したまうなり。舎利弗、の仏国土には、微風、もろもろの宝の行樹および宝の羅網（浄土にあるとされる宝珠を連ねた網）を吹き動かすに、微妙のを出だす。たとえば百千種の楽の同時ににすがごとし。このを聞く者、みなに念仏・念法・念僧の心を生ず。舎利弗、その国土には、かくのごときの功徳荘厳を成就せり。

　深く超えた心の精神世界、すなわち浄土の世界が開かれると、この世は光に満ち満ち輝いて

いるのです。だれしもすでにその中におりながら、帰る世界を外に、物質的に求めては見つけ

られずに流浪してきたのです。事実、私がそうでありました。何をしても暗く不安でどこか不

満がありました。

私はこの度アメリカ行きをご縁として、向こうからの道として「マイウェイ」の歌を如来さま

からの道として英語で歌ってみようと思い立ちました。練習すると難しいのに驚いています。でも、挑戦しようと努力しています。先日新潟県からご家族で聞光道に参加された林康一朗

さんが、迎えの車の中で「もう今から成功するような雰囲気ですね」と言われます。「そうです。

無碍光の世界は失敗ということが無いのです。失敗と思うから失敗なので、常に前進の世界は

失敗はないのです」と申しあげました。こんな事が言えるとは自分でも思わず笑ってしまいま

した。

幼い頃、なぜか印象に残った「いアヒルの子」という童話があります。群れの中におれな

くいつも不安で淋しかったころがあります。だから共感して印象に残ったのでしょう。でも、すべて本願念仏に遇うために通らされた道であったのです。海に帰るのにそれぞれの河の道を通らされるように。辛かったことや、苦しかったことも意義があったと喜びに変わって来ます。氷が水に溶かされ、湯にまで変化して行くようです。如来さまのお慈悲の光のお陰であります。周りの氷が溶かされることで私の救いの証明がなされます。国を超え、民族を超え、宗教を超えた一つの世界であります。大石先生が「本願が信じられたら、そこにあるどの一枚が欠けても咲かない、曼荼羅の華が咲く。無駄なものはひとつもない」と仰ったことがあります。何気なくその時は聞いていましたがこの頃実感させられます。

この世だけでなく、無限の過去も無限の未来も真如の光のお慈悲の中にあります。無量光、無

量寿の中であります。

　　無碍光如来の名号と

　　　の光明智相とは

　　　無明長夜の暗を破し

　　　衆生の志願を満てたまう

　　　　　　　　　　　　　　　　曇鸞和讃

令和六（２０２４）年六月上旬　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝